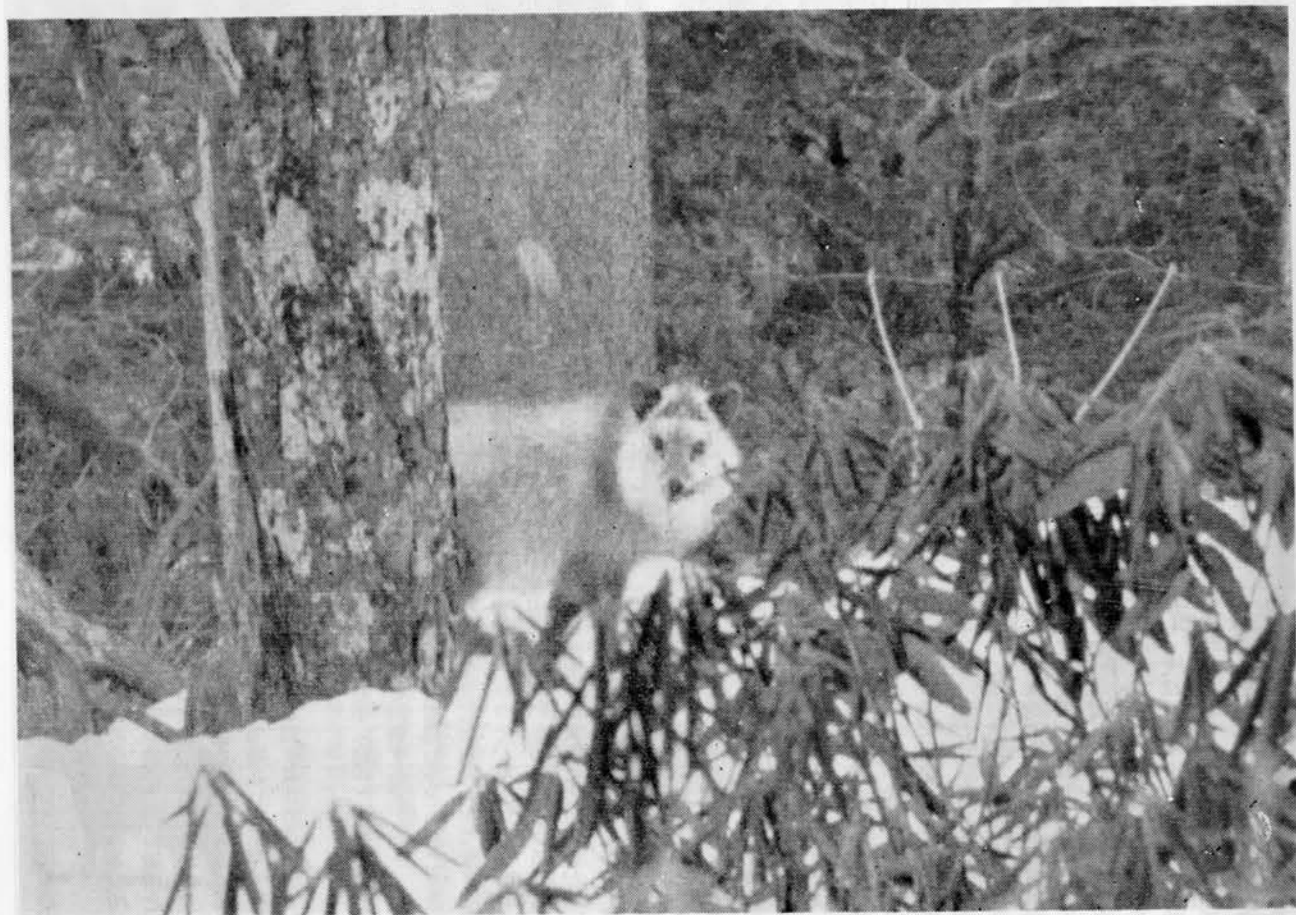


山と博物館

第9巻 第4号 1964年4月25日 大町山岳博物館



アルプスと農夫

早いものである。私が信濃教育会の代表としてイタリアのローマで開催された世界教育者会議に出席したのはもう四年の昔となっている。会議は八月一日から一週間、国際農業会館といった近代的なビルで、しかも冷房完全な場所で開催されたので日中三十八度上昇した気温の中でも極めて快適に進められたのは今でも記憶に新しいものがある。会議が終了すると北欧への旅に一人出発した。勿論飛行機であった。チューリッヒ湖畔の景色や世界的教育家ベスタロツヂの国スイスを夢みながらローマのホテルをたったのは八月八日の午前十時であった。羽田をたつ時もスイス、エアであったがこの時もスイス入であるから同様スイス、エアにした。イタリアとスイスの国境に近くなるにつれてアルプス山脈の偉大なる山容が手にとるように見えてくる。真夏ではあるが白雪におおわれている本もののアルプスである。雲海の中をどび雲海の上に出てとぶ。生れてはじめてのことでありこれが最後であることはいうまでもない。この機中で座席となりしてアメリカの一農夫がのっていた。老農である。つれづれのまぎにへたな会話をはじめた、この農夫は世界一週旅行の途中で、もう日本へもよってきたという話であった。西洋人として一人旅は珍らしいのでそのわけをきくとワイフが病気でこれないから見聞したことを土産にして帰るのだといいいながらポケットからワイフの写真を出して見ず知らずの私に見せながらニコリしたアルプスとこの農夫のことがいつまでも私の胸裏から消え去らないのが不思議である。

(教育長 矢口 亨)

カモシカを追って

高橋秀男

雪崩だ！

「ドドー」と物すごい音響とともに、私たちの頭上に雪塊がふりかぶってきた。とっさに身をひるかえした私たちは、それぞれ安全地帯に避難していた。

「ドサン、ドサン」と雪塊が眼前に落ち、見る見るうちに雪山ができていく。それもようやく静まって、雪崩の道跡を眺めたとき、ガサガサと物音をたてて、カモシカが斜面を上方へ駆けていくのを見た。黒褐色の大きなカモシカが落石を起しながら、藪の中に消えていった。私たちを雪崩の恐怖に巻き込んだ犯人は、じつはカモシカであったのだ。

これが入山の日、最初にカモシカと出合ったひとこまである。

博物館では去る三月下旬北アルプス北葛沢(運華岳と北葛岳の鞍部から信州側に出る沢)へカモシカ捕獲と調査のために入山した。

リーダーは猟師でもあり、山案内人もやっている鬼窪善一郎氏、過去にカモシカ狩猟の経験があり、この周辺の地形に詳しい。そのほか山案内人三名、博物館から海川学芸員に私、調査員の内田君も応援に加わり、総勢七名に勝野銀一氏の愛犬タローも従った。荷上げと下見を終った一行はわずかに残雪をのこす東電第三発電所の送水管の順視路にそって登った。

奥へ行くに従って、雪は深く芽ぶき前の木の間に越し、昨秋のクマの棚があちこちに残されている。

鳩峰に続く尾根通しをラッセルしながら前進していくとブナ林の雪面にカモシカの足跡

が発見された。鬼窪氏は足跡の大きさから、十才くらいの雌親で子連れ、しかも今朝歩いたものだと言明してくれた。足跡を追っていくと、オオカメノキ(一名ムシカリ、猟師はガンベと呼ぶ)のところで採食した跡が見られた。

鬼窪氏が「ガツタク」と名づけた下りをいっきに二百米ほど真直に下降して北葛沢の底に出る。ガツタクするほど急な斜面だからガツタクと呼んだそうだが、事実平均傾斜四十二度の急坂で閉口してしまった。北葛沢は入口に大きな滝が連続しているため、こんなに苦労して沢心に出なければならぬのだ。

沢はいたるところ兩岸から押し出した雪崩が推積して、スノーブリッジ、猟師のいうなで橋ができていた。私たちは一ノ二カ所渡渉しただけで、難なく東電の第三発電所取水小屋に到着した。

待ち場をつくる

今日のうちにもう一つやっておかなければならない作業があった。待ち場に網を張ることと待ちを切る(持ち場に隠れてカモシカの出現を待つ場所)雪洞をあらかじめ掘っておくことである。まず始めに捕獲する場所は小屋から五百米ほど沢をつめて、北葛沢の支沢になる深沢である。兩岸が極端に狭まり、陰惨な沢で、雪崩や落石には充分注意して歩かねばならない。カモシカの引き起した雪崩に遭ったのもこの沢であった。深沢のとりに雪がつかないことと入ることができない沢の口元を見るために、わざわざ下見をしたほどだ。

さて、ここでカモシカの捕獲の方法を説明しなければならぬ。

彼らはおよそ生活している場所が定まっている。長年の経験からその場所と、人間や犬に追われるとどこへ逃げるか、コースまでも知っている。彼らにとって逃げ道の最も条件の悪い沢を待ち場とし、下方へ行かないように沢を横切る網を張りめぐらしておくわけである。

そこで勢子(追手)と待ち場と二班に分かれて行動を開始する。

勢子は尾根通しひどい藪こぎをして、カモシカを発見したら、大声で騒ぎながら追い落とす。したがって、勢子は地形に詳しく馬力と山に経験深いものが望まれる。

カモシカは人間に追われると、いったんは下方の安全地帯まで逃げてから、再び人を避けて尾根を上方へと登ってくる習性がある。

この場合上へ坂けられると困るから、予想される尾根にそれぞれ勢子を配しておき、互に合図で追い始める。追われたカモシカは待ち場に出て降りの尾根に移るわけだ。

そこで、待ち場は、犬と犬をけしかける者網を持って捕獲する者二人、そのほかに持ち場からそれるコースを想定して、それぞれ重要なポイントに待ち伏せている。待ち場は雪の塊を積み上げ、人間の姿がすっぽり隠れるくらいに掘りさげ、壁に穴をあけてのぞいている。カモシカには絶対発見されないよう静かに二時間でも三時間でも辛抱強く待たねばならない。網の近くに駆け下りて来たとき、すばやく犬をけしかける。カモシカは犬と対面し、犬は吠え、カモシカは犬に角をつき合わせている。臆病なカモシカはもはや、人間の存在など忘れて、犬に気を取られている。そこを角めかけて網をかけるという算段である。

さて、ここでカモシカの捕獲の方法を説明しなければならぬ。

彼らはおよそ生活している場所が定まっている。長年の経験からその場所と、人間や犬に追われるとどこへ逃げるか、コースまでも知っている。彼らにとって逃げ道の最も条件の悪い沢を待ち場とし、下方へ行かないように沢を横切る網を張りめぐらしておくわけである。

途中、尾根筋を歩く勢子班には、カモシカノウサギ、サルなどの食こんが幾つも観察された。ノウサギの喰った枝は刃物で斜めに切ったようになっており、カモシカは枝をかじりつつのように、サルは樹皮をきれいにむいてあるので区別がついた。サルはノリウツギの皮を好んで食べるらしく、各所に裸になったノリウツギの枝が落ちていた。

カモシカの食こんについては今回の調査ではオオカメノキ、タラノキの二種しか観察されなかったのであるがその後思わぬ資料が得られたので触れておこう。

四月十三日、市内平区大出の高瀬川で水防の川牛にひつかかっているカモシカの死体が発見された。推定十二、三才雌親で、出生前約一カ月の胎児を持っていた。解剖の結果、大腿骨、肋骨、脊椎骨の骨折、第一胃の破裂舌の先頭部欠損など、かなりひどいものであった。

雪崩で死んだものかはっきりしないが、見るも無惨な姿に、関係者の同情を呼んだ。

第一胃の内容を調べたところ、コメツガ、オオカメノキ、ヤマグルマ、マンサク、オオバクロモジ、ミヤマカンズゲ(?)、リヨウメシダ、サルオガセの八種が確認された。

さて一頭を待ち場に追い出したあと、私たちは尾根を上へ上へと登り、相向かいの尾根に移ろうとした。このとき一つの点となって見えるような小さなカモシカを鬼窪氏がいち早く発見した。支尾根の見通しのよい雪上に

捕獲は失敗に終る



デブリのの上を行く調査隊

座って休息している。私たちがそのカモシカに接近しようと思いきや、彼は駆足で深沢をこえて私たちが、先程歩んできた尾根の方角へ去ってしまいい、待ち場には出なかった。
 飽きらめていたら、すぐ隣りの尾根にこんな度はずいぶんカモシカが休んでいた。先程のカモシカは雌親であったのだ。
 鬼窪氏は子どもは親から離れる時期だとい、カモシカの生まれたばかりのものを当オ(トーゼ)、一オの子をデワツ子、二オをニセツポ、三オをサンザイあるいはサンゼツポ四・五オを若ジシと呼んでいることもつづけてわけてくれた。

私たちがもつとも望んでいるカモシカは子どもであった。こんな気持もあって、待ち場の方角へ一生懸命で追うけれども、私

ちの動きを凝視しているだけで、一向に驚く心配がない。

純粋無垢な子どもは全く恐れない様子。

このデワツ子を一応あとまわしにして、次のカモシカを狙って、別々の尾根を下降していった。鬼窪氏の下った尾根には、やはりいつもの場所に休息していたという。これはうまく待ち場に追い出すことができた。

しかし、待ち場へ下ってみたら、皆がっかりしている。二頭が待ち場の近くの岩棚に現われたが、どうしても犬を離す位置まで接近してくれなかったようだ。

早速、同位置に動こうとしないデワツ子を捕えようと、上から沢に追い落とす方法で、再度場所を変えて待ち場についていた。

私はカメラのシャッターを切りながら、六十米ほど接近した。今までじつと一挙一動を注目していたものが、突然フーと鼻をならして怒り、逃げ出した。その方角は待ち場と別であり、これも失敗に終わった。

彼は四十度もある急斜面をバランスを保ちいったんは下降したが、再び上方へ登ってきいていた。それを知らずに尾根を横断してちよつとした凸起を乗り越えた瞬間、パツタリカモシカに顔を合わせてしまった。十米ほどの位置である。さすがの私も、どきもを抜かれたがカモシカもびっくりしたらしい。彼は飛び上るようにはねて逃げ去ってしまった。

行動範囲は一キロくらいか

第三日、雨で停帯。

第四日は滝沢で同様な方法で親子連れと雌一頭を追ったけれども、勢子の不足もあって待ち場のすぐ上の岩棚をうまぐまかれてしまった。

調査期間中、観察したカモシカは深沢三頭滝三頭、その他で一頭、総数七頭であった。

一頭を除いて二つの沢の例は互に離れ離れで行動はしていたが、ともに親子連れと雌であった。そして沢を中心に尾根から尾根までの巨離はおよそ一キロくらいである。わづかの例から推定することは早計である。しかし環境により異なるだろうがおよそその範囲に二頭が縄張りを持っているのではないだろうか。今後も調査を続けていきたい。

私たちの断片的な調査と猟師の話からこの時期のカモシカの生活を総合してみる。
 夜明けとともに行動を起し、岩陰から顔を出す常緑の草木や数少ない常緑樹を求めて、また落葉樹の芽や小枝を食べ歩く。
 そして九時―十時頃になって、見張らしのよい岩上や尾根の凸端などに座り込んで長い休息に入る。休息中は反すうを繰り返しているのである。夕刻三―四時頃、再び採食活動を始め、薄暗くなって、雪上の見通しのきく場所へ寝る。比較的単調な一日を送っているものと思われる。

本年の捕獲は時期や人員の問題で失敗に終ってしまった。しかし、幸にカモシカについては、断片的であるが多くの貴重なデータを得ることができた。この失敗の経験を生かして、できるだけ早い機会に、現在博物館で飼育しているク岳子さんの婚さんを捜したい。そして、今後も継続してカモシカに関する調査を進めたいと念願している。

(山博学芸員)



ウスバフユシヤクスのメス

深いエリマキで、オリオン座の傾くまで、かい中電燈をたよりに黒木の森にフユシヤクを追うのも、また格別である。

冬にならないと現れない。という変わりもの(蛾)で、アルプス山麓には6種類の仲間がいる。寒い時なので、それこそ防寒姿で現われるかと思えば、夏姿よろしく、羽はうすく、やわらかく、すきとおっていて毛も少なく、冬枯の雑木林をヒラヒラ飛んでいる。

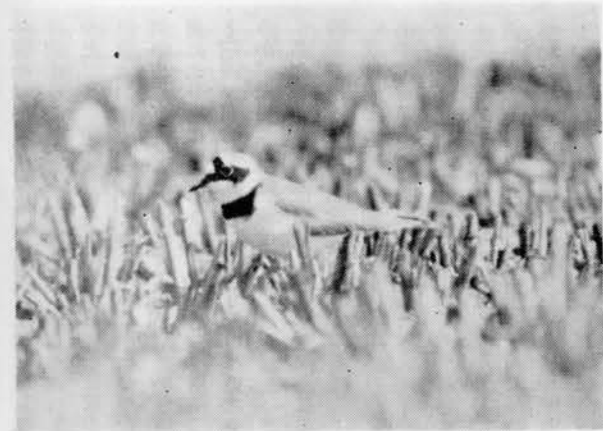
フユシヤク 倉田 稔

文政八年の冬現白馬村に起つた農民一揆を四か条騒動とも赤簾騒動と呼んで、今にいたるも北安曇地方における最も大きい騒動として伝えてある。しかしとかくいろいろな事件は人の語るにまかせ事実がゆがめられ誇大されて伝えられることが多く、この四か条騒動もその例にもれない。とくに四か条騒動の場合には首謀者がはっきりせず、どのような趣旨をもつた騒動であつたのかも史料の不足から断定しがたいが、出きる限りの史料をもとに、この騒動の事実を究明していきたい。今回はその出発点として、世上に流布されている記録の中から、この騒動のアウトラインを抜き出してみよう。

四か条騒動 (1)

この年は気候が農作に適さず、米穀の売りも、四か条名産の麻の茎葉の茂りも悪く、四か条から小谷地方にかけてはその年の租税にこと欠き、物価の上昇は秋の末に至ってますますひどく向米相場は金一両につき七斗五升と高値になり、貧民続出という有様であつたという。しかし四か条には米穀商いをする家もなく飯米の供給の便がなかつた。けれども四か条の中程飯森村には豪農の藤左衛門・藤四郎というものがいて彼等だけは多くの米穀を貯えており、これに着目した村人はその米を借りたいと頼み、また売ってくれと願って二人の家の門前に立つたが、二人はそのわずらわしさを考えて、同じ四か条の塩島新田の酒造家半蔵に酒米として貯蔵の米は大部分売ってしまったと答へ村人の要求をしりぞけた。そこで年の暮迫る十二月十四日の夜、佐野村増右衛門・沢渡村和左衛門らが俄にほら貝を鳴らし「皆々出てよ一人にても参らざる者はみなごろしに打ち潰すぞ。」と呼び、その声に応じて佐野沢渡飯田

飯森の四か条の村人が大挙してこれに加わり行動を起した。まず北に進んで塩島新田の酒造家半蔵の家を破壊し、それから南に戻って飯森村の藤左衛門藤四郎宅をおそい、これを手はじめに佐野坂を越えて大町に入り大町組大庄屋の栗林五郎右衛門家をはじめ村役人の家や商家その他富豪の家をつぎつぎにこわし更に宮本村より池田町村に出て同様富豪の家をおそつた。翌十五日は早朝池田町村を発して穂高町村に向つたが、その頃には同勢は一万人を数えたという。十日市場村のあたりで高瀬川を渡るところ、松本藩の安曇郡代官中村弥平左衛門やもう一人の大町組の大庄屋西沢松川組大庄屋清水らが松川組の人夫数百人を指図して騒動を鎮めようとしたが、これを打破つて進み、穂高組大庄屋井口家をはじめ、商家を破壊、つづいて等々力町村さらに新田町村(現豊科町)へと暴動を進めた。この頃松本藩では事の重大さに驚き、郡奉行二人同心数十人を現地へ急行させ、つづいて藩の物頭四人、大目付二人、郡奉行四人、使番三人、同心足軽数百人を引具して到着、空鉄砲を打ちかけたので暴徒はこの有様に驚き、遂に乱し四散しはじめ、息をころして物陰にひそむ者もあつた。しかし捕縛されるもの三百人あまりに及び、松本へ引かれていって暴動も終りを告げた。この捕縛されたもの翌年その大半は放免され、この騒動は全く閉息したというのである。



雪消えを待っていたかのように、今年も例年のように狂いなく燕がやって来た。燕がやって来る和本当に春が来たということをつくづくと感じさせる。当地では3月30日から4月2日の間に毎年必ずやって来る。その燕と前後してやって来るのがコチドリである。特徴のあるヒヨイ、ヒヨイという鋭い鳴き声で、すこぶる速い直線的な飛び方で飛来し、雪消えて水の濁った水田などに下りてエサをあざつている。渡来した当時は水田などによく見かけるが次第に繁殖地の川原へ移つて行く。巢は川原の砂礫地に小さい窪地を作つて砂の上に直接産むが、卵は小石と同じような色彩で仲々発見しにくい。

コチドリ 長沢修介

博物館 ニューズ

休憩室に開放
山博の講堂はいままで、会議室、映写室などに使われていたが、こんど周囲をベニア板で張り包み、市民サービスの一環として休憩室、レジャールームとして開放する。五月一日からの「自然の顔」、「タンチョウズル展」に利用するほか、室内にはテレビ、ステレオ、山岳図書なども備えて市民の利用を願おうという訳。

展示は果委託
植樹祭に県下を訪れる両陛下をお迎えするため、松本城内に昔の登山用具、ピッケル、ザイル、ワカンジキなど約二十点を出品、ケース二つに展示して天覧に供することにした経費は県委託金四万七千円でまかなわれる。

ことしもライチョウの保護増殖
北アに棲むライチョウの保護増殖事業を進めるため、国の補助や、市の財源、ライチョウの本の印税を充てて今年も実施することにした。昨年の経験を生かして今年は是非とも成功させたい。

表紙説明
カモシカ(推定一才) 北葛沢深沢地籍
撮影 高橋 秀男

山と博物館 第九巻 第四号
発行所 一九六四年四月二十五日発行
長野県大町市TEL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場